

「清潔」の援助技術に共通技術の要素をとり入れた教育方法の検討 — 一校の演習・実習後の比較 —

菊池和子, 三浦まゆみ, 平野昭彦, 伊藤道子, 高橋有里, 石田陽子, 三浦奈都子
兼松百合子, 中村令子, 千葉ミツ子, 平栄子, 荒谷寿子, 岩間亜由美

A study of education methods incorporating elements of common nursing skills into the nursing skill 'hygiene' — A comparison after the skills laboratory practice and practicum in one school —

Kazuko KIKUCHI, Mayumi MIURA, Akihiko HIRANO, Michiko ITO, Yuri TAKAHASHI
Yoko ISHIDA, Natsuko MIURA, Yuriko KANEMATSU, Reiko NAKAMURA
Mitsuko CHIBA, Eiko TAIRA, Hisako ARAYA, Ayumi IWAMA

要 旨

平成11年度に行った基礎看護技術の教育内容の検討から各単元の看護技術を教授する際に共通技術を意図的に組み込むことで、学生の理解がより深まり、多角的に看護技術を捉えることができるものと考えた。共通技術の中で、近年、必要とされている技術を取り上げることとし、『感染予防』、身体状態をアセスメントする能力としての『フィジカルアセスメント』、対象の意思決定を尊重し、対象の自立を促す指導・教育を含めた『自立への援助』、コミュニケーションを含めた『心理的ケア』の4つを各単元に組み込むこととした。清潔の援助技術の単元で、4つの共通技術を組み込み、事例を用いてグループで演習する授業を行い、その効果について授業直後と1ヶ月後の実習後と比較し検討した。分析対象はI大学看護学部1年生91名中調査の同意が得られた76名。分析方法は授業の前後、及び1日の基礎看護実習終了後の3回、授業で提示した事例を用いて患者への援助内容（前、中、後）を自由記載させその内容を一つの意味をもつセンテンスを1と数え、4つの共通技術と、その他に分類し以下の結果を得た。

1. 『フィジカルアセスメント』は、実習後に記述数が有意に増加した。実際の患者の援助を行うことで具体的なイメージが付き記述数が増えたと考えられる。
2. 『自立への援助』は、授業後と実習後に授業前に比べて有意に記述数が増えている。実習で患者のできる部分を行うような働きかけや患者の意思を尊重するように選択を促すなどによって記述数が増加したと考えられる。
3. 『感染予防』は、授業後記述数が増えたが、実習後に減っている。授業後にスタンダードプリコーションとして知識としては身につけても、臨床現場で具体的にイメージできなかったものと考えられ、教育的な関わりが必要である。
4. 『心理的ケア』は、実習後に有意に減少している。授業や実習においてより具体的な把握や配慮の内容として学ばれ、他の項目に分類されたり、より精選された内容となったものと考えられる。

キーワード：清潔の援助技術 共通技術 教育方法 基礎看護技術教育

I. はじめに

医療の進歩と人々の生活ならびに健康問題の変化に伴い拡大・高度化している看護職へのニーズに対応できる能力を育成するために、その基本で

ある「基礎看護学」「基礎看護実習」の内容、教育方法、担当者、各看護学との関係を再検討することを目的とし、平成11年度に基礎看護学の教育内容の検討を行った¹⁾。看護系大学47校のシラバス調査から看護技術の教育内容は、コミュニケ

ーション, 安全, 安楽, 感染予防, 教育・指導, フィジカルアセスメント, 看護過程などの看護行動に共通する基礎的な行為としての共通技術, 生活援助技術, 治療援助技術の3群に大別された²⁾.

さらに, シラバス調査から得られた基礎看護技術の教育内容を検討するために, ヘンダーソンの基本的看護ケアの14項目から看護技術の教育内容を導き出したものと, 健康問題に対する人間の反応に着目しているNorth American Nursing Diagnosis Association; NANDA看護診断から導き出した教育内容を, シラバスの教育内容と照らし合わせた. その結果, ヘンダーソンの基本的看護ケアやNANDA看護診断の各項目に多くみられる教育内容は, シラバス上では共通技術に位置づけられるものが多く, 各技術項目にはほとんど含まれていない状況であった. 現在の看護技術教育では共通技術と各看護技術は分断されて教授される傾向にあり, 統合されたものとはなっていないものと推測された. 例えば共通技術として感染予防について教授されるが, 清潔の援助技術の単元では, 清潔の援助技術に焦点化され感染予防の観点からは教授されていないものと推測される. この結果から各単元の看護技術を教授する際に意図的に共通技術を組み込むことで, 学生の理解がより深まり, 多角的に看護技術をとらえることができるものと考えた³⁾. その際に共通技術のなかで, 近年, 看護技術に必要とされている技術を取り上げることとし, 『感染予防』, 身体状態をアセスメントする能力としての『フィジカルアセスメント』, 対象の意思決定を尊重し, 対象の自立を促すという指導・教育を含めた『自立への援助』, コミュニケーションを含めた『心理的ケア』の4つを各単元に組み込むこととした.

看護技術教育方法について, 課題を用いた演習導入の報告⁴⁾や, 清潔援助技術に事前課題から講義を行い学内演習, 臨地実習につなげる教育の報告⁵⁾, 生活援助技術にグループ学習を導入した報告⁶⁾があるが, 共通技術を意図的に各単元に組み込んでいるものはみられない.

今回, 清潔の援助技術の単元(口腔ケア, 陰部洗浄を除く)で, 共通技術のうち特に『心理的ケア』『フィジカルアセスメント』『自立への援助』『感染予防』(以下4つの共通技術とする)を組み込み, 事例を用いてグループで演習する授業を行い, その効果について授業前後と1ヶ月後に行われた実

習後を比較し検討したので報告する.

なお, 本論文は, 先の報告にあるI大学の授業の実際を述べ, 先の報告に続き新たに実習との関連について分析, 考察したものである.

II. 研究目的

清潔の援助技術の単元に看護技術の『共通技術』を意図的に取り込む授業の効果を明らかにする.

用語の定義

- ①心理的ケア: プライバシーの保護や配慮など気遣いに関すること, 意図的なコミュニケーション
- ②フィジカルアセスメント: 観察, バイタルサイン測定, 身体診査に関すること
- ③自立への援助: 残存機能の活用, ADLの拡大, 自立を促す指導・教育, 意思決定の尊重に関すること
- ④感染予防: 感染予防の必要性, スタンダードプリコーションに基づく行為に関すること

III. 研究方法

1. 分析対象

I大学看護学部1年生91名中同意の得られた76名.

倫理的配慮: 調査の趣旨, 参加の有無により成績には関係ないことを説明し, 個人が特定されないように自分の好きな記号を記述することとし, 同意の意思が記入されている記録を分析対象とした.

2. 方法

- 1) 調査時期: 2002年11月~2003年1月
- 2) 授業科目: 看護援助技術論I (1年次後期の科目) 60時間, 2単位

清潔援助技術の単元について

時間数: 10時間(グループワーク4時間, 演習6時間). 時間外に清拭の技術テストを学生1名ずつに対して行う.

看護援助技術論の既習内容: 「看護における技術の概念」「安全・安楽・自立への技術」「健康状態の査定に関する技術」「感

染予防」「活動と休息を促す技術」「生活環境を調整する技術」「体温調節のための技術」

3) 授業時期：看護基礎理論で看護過程を学んだ直後。

1年前期に終了している基幹科目・専門

基礎科目：看護学序論，形態機能学Ⅰ，感染免疫学，人間発達論，人間関係論，

同時進行の科目：看護基礎理論，形態機能学Ⅱ，家族論，異文化論，医療倫理，医療福祉・行政論

担当教員：6名

4) 授業方法：

授業の全体像を表1に示した。

(1) 初回の授業で共通技術について講義（1時間）

表1 清潔援助技術の学習・指導過程

《学習目標》		
1. 人間にとっての清潔の意義を理解し，看護の役割を理解する。		
2. 清潔ケアの方法を習得する。		
3. 清潔ケアにおける観察事項を理解する。		
《学習内容》		
1. 身体を清潔に保つことの生理的，心理的，社会的意義		
2. 皮膚の構造と機能，毛髪構造と機能		
3. 清潔ケアにおける看護の役割		
4. 清潔保持の方法の選択，アセスメントの視点		
5. 清潔ケア		
1) 清拭 2) 洗髪 3) 手浴，足浴 4) 寝衣の交換		
《学習・指導過程》		
時間	学習活動・内容	指導上の留意点及び教員ミーティング
前回授業 時間外	グループワークで取り組む事例を知る 事前学習課題 課題レポートの作成	○事例を提示し，学習に対する動機づけを行う ○清潔の援助に必要な学習を行わせる
第1回 (90分)	グループワーク 事例のアセスメント，診断，計画の立案を行う 後日，レポートとして担当教員に提出	○各教員が3～4グループを担当する ○事例の患者を想起するように指導 ○既習の看護過程の再確認 <教員のミーティング> 計画の立案までのレポートを共有、指導内容の確認 次回のグループワークの課題を確認
第2回 (90分)	グループワーク 学習内容をグループで共有 自分たちの考えた計画から演習計画の立案（期待される成果，演習方法，留意事項，準備するもの，患者役，看護師役などを記載）し、担当教員に提出	○学習内容の各項目で4つの共通技術について考えるように指導 3. 看護の役割…自立について考えさせる 4. アセスメントの視点…フィジカルアセスメントについて考えさせる 5. 清潔ケア…感染予防，心理的ケアについて考えさせる
時間外	演習までにグループでビデオを視聴する ・清潔ケアの意義をテーマとしたもの ・全身清拭（手浴，足浴を含む） ・ケリーボードによる洗髪 ・洗髪車による洗髪	○演習には清潔ケア項目が含まれるように指導する <教員のミーティング> 演習計画書の共有，指導内容の確認 演習についての打合せ
第3回 (210分)	演習計画にそってロールプレイングにより清潔ケアを演習 演習後，グループメンバーによる評価を行い担当教員へ提出	○清潔ケアの原理・原則に基づいて演習するように指導 ○4つの共通技術について考えながら演習するように指導 ○患者役の学生は事例の患者になりきるように指導 ○評価までの看護過程の一連のプロセスを学ばせる
時間外	1名ずつ背部清拭の技術テスト	背部清拭ができることを目指して教員間で共通のチェック項目でテストを行い、不足の部分は指導する

(2) 清潔の単元で、学生は清潔の意義等の基礎知識についての課題レポートを提出し、自己学習からグループ学習を行なった。91名の学生を20グループ（1グループ4～5名）に分け、教員は3～4グループを担当した。学生の主体的な学びを重視するために、学生に学習項目及び演習項目（清拭、足浴及び手浴、洗髪、寝衣交換）を提示しグループで学習する形態をとった。

(3) グループ毎に事例（資料）に対してどのような援助が必要か、日常生活行動への援助を中心として、情報のアセスメントを行い、次に清潔の援助に焦点をあて、診断、計画を立案した。

計画を具体的にどのように実施するのか、清潔の援助方法を考え、準備する物品や手順を含めた演習計画書を担当の教員に提出した。その計画書は担当教員の指導を受け最終的な演習計画書として再提出した。

(4) 演習は各グループ毎に、清拭、足浴又は手浴、洗髪、寝衣交換について看護者役、患者役をそれぞれ交代して実施した。実施後、グループ毎に評価した。

5) **教員の指導について：**4つの共通技術を学生が演習に組み込んで考えられるように直接内容を教え込むのではなく学生に考えさせ学生の考えを引き出すようにした。例えば『感染予防』では「スタンダードプリコーションの考えからどんなことが必要だろうか」と発問するような意図的な関わりをもった。

また、学生がグループワークの中で必要とされる情報、例えばバイタルサインのデータ等はあらかじめ、統一したデータを考え、質問された際に学生に提示することとした。

教員の指導の統一を図るために授業前後、演習前にミーティングを持った。

6) **分析方法：**授業の前後、及び1日の基礎看護実習（一人の受持ち患者の日常生活行動への援助を中心とする実習）終了後の3回、授業で提示した事例を用いてその患者への

援助内容（前、中、後）を自由記載させた。

自由記載内容を一つの意味をもつ文章を1センテンスと数え、4つの共通技術と、その他に分類した。分類に当たっては研究者各自で分析したものを意見が統一されるまで検討を行った。分析例(表3)のように、学生の記述した内容を4つの項目に整理した。記述数の平均を出し、授業前後、実習後との差をみた。統計ソフトはSPSSを使用し、授業前後、授業前と実習後、授業後と実習後と関連についてt検定を用いて検定した。

IV. 結 果

授業前後と実習後の文章平均数は表2の通りである。

表2 授業前後と実習後の文章平均数 N=76

項 目	文章数平均(SD)	有意差
心理的ケア	授業前 3.89(3.20)] *]
	授業後 3.39(2.13)	
	実習後 2.92(2.27)	
フィジカルアセスメント	授業前 2.84(1.90)] *] **
	授業後 2.64(1.71)	
	実習後 3.41(2.05)	
自立への援助	授業前 0.95(0.98)] *] *
	授業後 1.26(1.09)	
	実習後 1.39(1.26)	
感染予防	授業前 0.17(0.94)] **] **
	授業後 0.51(1.10)	
	実習後 0.22(0.48)	
その他 (4項目以外)	授業前 2.22(2.24)] **] **
	授業後 4.33(3.03)	
	実習後 4.04(2.35)	

*p<0.05 **p<0.01

『心理的ケア』は、授業前3.89 (SD3.20) が実習後2.92 (SD2.27) と有意に減少している (P<0.05)。

『フィジカルアセスメント』は、授業前2.84 (SD1.90) が授業後2.64 (SD1.71) と若干減少しているが、実習後には3.41 (SD2.05) と有意に増加し (P<0.05)、授業後より有意に増加している (P<0.01)。『自立への援助』は、授業前0.95

(SD0.98) に比べ実習後1.39 (SD1.26) と授業後1.26 (SD1.09) に有意に増加している ($p < 0.05$). 『感染予防』は、授業後0.51 (SD1.10) で授業前0.17 (SD0.94) と比べて有意に増加している ($P < 0.01$). 『その他』は、手順や留意事項、看護過程について等の記述であった。

分析例 (学生の記述例, 表3に示す) でみると、『心理的ケア』の項目では、授業前2センテンスであり授業後5センテンス, 実習後は5センテンスとなっている。記述内容をみると授業後の援助

中では「声をかけることは忘れずに行うようにする」であり, 実習後は「援助のみに集中せず, 患者とのコミュニケーションをはかり, その後の援助に役立てる」という記述内容となっている。

『フィジカルアセスメント』は, 授業前は記述はないが, 授業後に3センテンスあげられ, 実習後は6センテンスあげられている。記述内容でみると授業後は「患者の全身状態をよく観察する」と記述されていたが実習後は「肌のアセスメント」と具体的な内容があげられてきている。

表3 分析例 (学生の記述例)

項目	授 業 前			授 業 後			実 習 後		
	援助前	援助中	援助後	援助前	援助中	援助後	援助前	援助中	援助後
心理的ケア		受けている援助が患者にとって本当に望んでいるものであったか、望むように援助できているか、患者の言動から何う。	患者の要求(様子)をできる限り察知する。	入院生活で清潔に対してどんな不満欲求を持っているのか、普段の会話から聞き取り、それに対してどのような援助ができるかを患者のケガの具合を配慮しながら考える。	援助が患者に与える影響が良いものであるか(不快でないか)また、どのようにしたら気持ち良いか伺いながら進める(ケガへの影響)。患者の羞恥心を最小限にするため人の出入りがないよう、また不必要な露出を避けるよう援助する。声をかけることは忘れずに行うようにする。	援助によって援助前の不快感等が取り除かれているか患者に尋ねる。	援助するまでの間、どのようしたら患者の不快感を軽減させられるかを考え工夫し実行する。	援助方法が患者にとって安楽で心地よいものであるか確認し患者の細かな要望を聞き取り入れていく。援助のみに集中せず、患者とのコミュニケーションをはかりその後の援助に役立てる。	援助は患者にとって心地よいものであったか。援助が患者に与えた影響。
フィジカルアセスメント				援助する状況の室温や患者の保温の体制を整え、健康状態にいつもと変わりはないかチェックする。	患者の全身状態をよく観察する。	患者の全身状態をよく観察し、変化はないか気をつける。	体調は悪くないか。その患者が最も安楽に気持ち良く援助を行える方法を考え工夫する(右下腿の痛みや全身打撲等に配慮)。	体調は悪くないか。肌のアセスメント。右下腿をできる限り動かさない(患者の苦痛を最小限に抑える)。	体調は悪くないか(患者の様子)。
自立への援助	普段の生活において患者が清潔に対してどのような意識をもって生活しているかを聞き必要であれば清潔を保つ手段で患者に合うものを考え助言する。	患者が自分でできる清潔を保つための方法を考えアドバイスする。		援助する際、Aさんがどのようにして欲しいかを聞いておく。	患者が自分でできることはやってみようとする。		特にどのあたりを拭きたいかどのような援助をして欲しいかを聞く。いつ清拭をしたいかを聞く。		
感染予防					援助する際、感染したりしないように、援助部位に傷はないか調べ、必要に応じて手袋など工夫をする。				

『自立への援助』では授業前2センテンスあげられたものが授業後、実習後も同様の数あげられている。記述内容でみると授業後は「援助する際、Aさんがどのようにして欲しいかを聞いておく。」であり、実習後は「特にどのあたりを拭きたいのか、いつ清拭したいのかを聞く」と、より具体的な内容となっている。

『感染予防』については授業後に1センテンスあげられている。授業前、実習後はあげられていない。

V. 考 察

清潔の援助技術の単元に、共通技術を組み込んだ授業を行い、共通技術の記述数から授業前後、実習後の比較を行った。

『フィジカルアセスメント』では、実習で患者の援助を体験し、具体的なイメージがつき援助の前後にバイタルサイン測定を行うこと等で授業後若干減少した記述数が有意に増加したと考えられる。

『自立への援助』は、実習で患者のできる部分を行うように働きかけたり、患者の意思を尊重するように選択を促す等によって記述数が増加したものと考えられる。

『感染予防』は、授業後に増えたが実習後に減少している点については、授業後にスタンダードプリコーションとして知識は身についても実際の援助の中で具体的にイメージできなかつたこと、臨床場面であまり行われていない状況や行われていても学生が認識できなかつたことが推測される。例えば、清拭の使用済みのタオルの処理方法や、汚水の処理方法、皮膚の状態をアセスメントし手袋を使用するなど、今後、具体的な状況での働きかけや行動の意味づけを行い、学生が自ら気づくような教育的関わりが必要である。

『心理的ケア』については、実習後に有意に記述数が減少している。授業前には、プライバシーの保護や患者に対する配慮を中心に考えていたことが、授業や実習によってより具体的な把握や配慮の内容が学びとられ他の項目に分類されたり、より精選された内容となったものと考えられる。

清潔援助の技術に意図的に4つの共通技術を組み込む授業で、『自立への援助』『感染予防』の記述が増え、実習後に『フィジカルアセスメント』『自

立への援助』の記述が増えていることから授業での学習効果があらわれ、さらに実習で学びが強化されたと考える。

『フィジカルアセスメント』は一つの科目として系統的に教授している学校もあるが、各単元の技術に組み込むことで、その必要性や目的がより明確化されるものと考えられる。『感染予防』については、スタンダードプリコーションの考え方は分かっても各看護技術の単元のなかで学生が具体的に気づくような教育的関わりが必要である。

共通技術は各看護技術に共通するものとして取り上げられたものである。つまり、当然各看護技術に含まれているものであるが、従来の教育では、共通技術と、各単元の技術は各々に教授される傾向となり、学生は統合して理解することが困難であったものと推測される。

今回の授業で共通技術を意図的に組み込んで教育することで、学生は共通技術をも含めた清潔援助の技術として捉えることができ、より対象者を全体として捉え看護技術を意味づけることができたと考えられる。

今回の授業では、講義を行わずに事前課題による学生の自己学習からグループ学習により演習を行い、評価することで、看護過程の展開についての学びや、主体的に学ぶ態度も育成されたものと考えられる。

VI. 結 論

清潔の援助技術の単元に共通技術を組み込む授業の効果事例の援助についての学生の記述数から授業前後と実習後で比較し、以下の結果を得た。

1. 『フィジカルアセスメント』は、実習後に有意に記述数が増加した。これは、実際の患者の援助を行うことで具体的なイメージがつき記述数が増えたと考えられる。
2. 『自立への援助』は、授業後と実習後に授業前に比べて有意に記述数が増えている。実習で患者のできる部分を行うように働きかけたり、患者の意思を尊重するように選択を促す等によって記述数が増加したと考えられる。
3. 『感染予防』は、授業後記述数が増えたが、実習後に減っている。授業後にスタンダードプリコーションとして知識としては身につけても、臨床現場で具体的にイメージできなかつた

ものと考えられ、教育的な関わりが必要である。
4. 『心理的ケア』は、実習後に有意に減少している。授業や実習において具体的な把握や配慮の内容として学ばれ、他の項目に分類されたり、より精選された内容となったものと考えられる。

文 献

- 1) 兼松百合子：医療の進歩と看護ニーズの変化に対応する「基礎看護学」の教育内容の検討—大学の場合—，平成11年度～平成12年度科学研究費補助金（基盤研究C2）研究成果報告書，2001.
- 2) 高橋有里，柴田千衣 他：医療の進歩と看護ニーズの変化に対応する「基礎看護学」の教育内容の検討—基礎看護技術科目の分析から—，岩手県立大学看護学部紀要，3，113-120，2001.
- 3) 菊池和子：基礎看護技術教育の検討—ヘンダーソンとNANDAからみた分析より—，兼松百合子，医療の進歩と看護ニーズの変化に対応する「基礎看護学」の教育内容の検討—大学の場合—，平成11年度～平成12年度科学研究費補助金（基盤研究C2）研究成果報告書，26-34，2001.
- 4) 坂本祐子，横田治美 他：基礎看護技術学習における課題を用いた演習導入の評価，第29回日本看護学会集録，看護教育，135-137，1998.
- 5) 竹尾恵子，亀岡智美：看護基礎教育課程における看護技術教育の展開と課題—国立看護大学校における実際を一例として—，看護展望，28（4），47-55，2003.
- 6) 宮脇美保子，深田美香 他：生活援助技術における学生主体の授業とその評価—グループ学習を導入して—，Quality Nursing，8（9），53-59，2002.

資 料

事例：

Aさん，55歳，女性，夫55歳，会社員で現在単身赴任中，息子一人27歳，1年前に結婚し，他県（遠方）に住んでいる。現在Aさんは一人暮らし，犬を非常に可愛がっている。専業主婦であり，サークル活動にも積極的。スキーをするのが楽しみ。11月初旬，朝の犬の散歩中，公園の階段から落ち，通りがかった方の連絡で救急車にて入院した。左腓骨骨折と全身打撲。骨折部位は腫脹が強いためギプスをまかず，シーネ固定し，安静の保持が必要。本人の強い希望でトイレに車椅子で連れていってもらう。その際患肢を下げると痛がる。入院4日目に患者のケアを担当。左下腿を動かすと強い痛みを訴える。ベッド上安静の状態である。食事は全量摂取しているが，ふだんの生活でも食事は脂っこいものを食べないように気をつけているとのこと。入院時にシャワーもだめと聞いてがっかりした。サークル活動の友人達が見舞いに時々来てくれるが，「お風呂に入っていないので，臭わないか心配」と話す。また「ベッドに寝ている状態が長いので，背部が汗ばんで気持ち悪い」と訴える。

Abstract

Classes were held in which case studies were employed within group skills laboratory practice. The classes incorporated four areas of common nursing skills (*'Infection control'*; *'Physical assessment'*; *'Supporting patient independence'*, and *'Psychological care'*) into the curriculum unit of the nursing skill 'hygiene'.

The participants were 76 first-year students at the university Nursing Faculty.

For the analysis methodology, students were asked to write freely about how they could prepare to assist the patients, actually assist the patients, and provide after-care for the patients for the case studies given in the class. These writing tasks were carried out pre- and post- class for the nursing skill 'hygiene', and once again after the one-day practicum, creating three datum sets. The following results were obtained:

- (1) *'Physical assessment'* and *'Supporting patient independence'* - After the practicum, the number of data entries increased.
- (2) *'Infection control'* - Compared to data obtained prior to the classes, the number of data entries made on this subject post-class increased, however, the number of data entries made post-practicum decreased.

The students were unable to transfer their theoretical knowledge on the subject into a hospital environment, and there is seen to be a need to make an educational connection between theory and practice.